



みつや ひろあき
満屋 裕明（学術）

昭和25年（1950年）8月9日 生
（満72歳）

【写真は本人提供】

満屋氏は長崎県佐世保市で生まれる。熊本大学医学部医学科を卒業後、熊本大学医学部内科学講座第二助手となる。昭和57年アメリカに留学、米国国立癌研究所客員研究員、特別研究員、主任研究員を経て、米国国立癌研究所レトロウイルス感染症部内科療法部門部長となる。平成9年から平成28年まで熊本大学内科学第二講座教授を兼務。また平成24年から国立国際医療研究センター臨床研究センター長、研究所所長を歴任。併せて、平成28年より熊本大学特別招聘教授、熊本大学名誉教授、平成29年より千葉大学客員教授、獨協医科大学特別栄誉教授を務める。

成人T細胞白血病の研究を行っていた満屋氏は、渡米後白血病と同様の免疫細胞（ヒトCD4陽性T細胞）に感染するエイズウイルス（ヒト免疫不全ウイルス）の研究を始めた。氏は、その標的細胞を用いて、抗ウイルス活性の評価方法を確立し、エイズ治療薬AZT（アジドチミジン）の開発に成功した。AZTは昭和62年に世界で最初のエイズ治療薬として認可された。その後、満屋氏により世界で2番目の治療薬ddI（ジダノシン）、3番目の治療薬ddC（ザルシタビン）も開発された。また、満屋氏が4番目に開発した治療薬ダルナビルは、途上国が特許料を払わずに使える医薬品として世界で初めて国連に登録された。その結果、満屋氏が開発した薬は世界中で提供され、エイズ治療に大きく貢献することとなった。

満屋氏の最も重要な業績の1つはレトロウイルス感染症に対して化学療法が可能であることを初めて示した点にある。満屋氏の研究成果に触発され、多くの新規抗ウイルス薬が開発された。その結果、かつて「死の病」であったエイズは「コントロール可能な慢性感染症」へと変貌し、世界の多くの感染者の命が救われた。満屋氏は現在も先導的な研究を行い、B型肝炎ウイルスや新型コロナウイルスの治療薬開発にも貢献を続けている。

これらの功績から、紫綬褒章、慶応医学賞、読売賞、朝日賞、日本学士院賞、熊日賞、米国国立癌研究所所長賞など多数の賞を受賞している。

平成3年～現在	米国国立癌研究所レトロウイルス感染症部内科療法部門部長
平成9年～平成28年	熊本大学医学部内科学第二講座教授
平成24年～平成28年	国立国際医療研究センター臨床研究センター長
平成28年～現在	国立国際医療研究センター研究所所長
平成28年～現在	熊本大学特別招聘教授、熊本大学名誉教授
平成29年～現在	千葉大学客員教授、獨協医科大学特別栄誉教授